

● 九州

西田 紘子

音楽演奏活動が多様化する中、近年注目されているのが、音楽団体やホール、音楽家個人によるSNS活用である。SNSの隆盛は今に始まったことではないが、企画関係者がどのように情報を発信して周囲と関係を結んでいくかに関する議論を、今年よく耳にした。

FacebookやTwitter, InstagramといったSNSは、うまく「バズらせる」ことができれば、それまでその活動に関心のなかった層にまで情報を届け、魅力を感じてもらえる魔法のツールである。団体という看板を知るだけでなく、音楽家「個人」と気軽に触れ合えるという点で、従来の「企画側—顧客」の関係が作り変えられつつある。

ただしSNSの活用法は十人十色。公演の裏側を適度に開示して話題を集めているものもあれば、シンプルな公演情報発信に留めているものもある。使い方によってはイメージやブランドにとって逆効果になりかねないのも難しいところだ。来年以降もおのおの模索を続けていこう。こうしたことを念頭に置きつつ、福岡を中心に2019年の九州における演奏活動の一部を振り返ってみたい。

4月からTwitter公式アカウントを始動した九州交響楽団。2020年3月の東京公演を控え、さらに地力をつける1年となった。

福岡シンフォニーホール改修のため、2019年度シーズンの定期演奏会は7月から始まった。音楽監督7年目に入った小泉和裕が率いるマーラーの交響曲第3番（第375回定期）は、九州外からも注目を集め、高い評価を得た。第377回定期ではブルックナーの交響曲第7番がとり上げられ、3月には前年に演奏されたマーラーの交響曲第8番がCD化された。九州で演奏機会を設けるのが難しいブルックナーやマーラーといった大作を毎年プログラミングすることで、聴衆の集中力も上がってきている。楽団には、福岡を中心に多様な聴取体験を提供する牽引力として、一層の飛躍と、より多様な層へのアプローチが期待される。RKB毎日放送との連携企画として福岡県内の吹奏楽部に所属する高校生を演奏会に招待する「RKBみらいシート」が設けられていることもあり、ここ数年、若年層の来場者は少しずつ増えてきているようだ。

5月には末永直之氏が世を去った。末永氏の浄財と志により、1987年に専用練習場・末永文化センターが設立されたのだった。氏の尽力は忘れがたき恩として語り継がれよう。

その他、鈴木優人指揮による第373回定期（2月）が、意外性あるプログラムで九響に新局面を拓いた。第379回定期（11月）では、九響合唱団が中心となってフォーレのレクイエムにとりくみ、その向上を印象づけた。第380定期（12月）には国内オーケストラと初共演となるロシアの指揮者ヴァレリー・ポリヤンスキーが登場。九響が率先して人材を発掘・紹介していくのだという意気込みもみてとれた。

楽団員のリサイタルや室内楽公演も続いた。引き続き、九州を拠点に活動する他の音楽家にとって刺激となるような、精神的に独自性ある企画や連携が望まれる。楽団員の世代交代も進み、パーカッションの関修一郎をはじめ楽団の生き証人たるブ

レイヤーが退き、若き人材が早くも活躍をみせている。2020年度プログラム発表記者会見で小泉監督が述べた通り、今後は空席となっている残りの首席奏者を定め、「これぞ九響サウンド」というものを轟かせていくことになるだろう。

アクロス福岡は開館25周年を迎えた。アクロス弦楽合奏団第13回定期演奏会は、その記念も兼ねてモーツァルトの交響曲第40番に指揮者なしで挑み、緊迫感ある演奏を聴かせた。九州内の音楽家と全国的に活躍する音楽家とのコラボレーションを通して、福岡における演奏の質を高めることに貢献している。また、本年からアクロス福岡を拠点とする福岡ジュニアオーケストラも始動した。今後のコラボレーションが楽しみだ。

吹奏楽文化に関しては、九州管楽合奏団の活動も特筆に値する。中田延亮の指揮で15周年記念プログラム公演が開催され、ジャンルや時代・地域を越境する選曲でホールを賑わせた。一方、「新・福岡古楽音楽祭」やコンセール・エクラン福岡の活動等を通して、福岡は古楽でも活発な地域となっている。後者はLINEを含むSNS活用法でも先進的であり、工夫ある仕掛けを通して今までにない形で古楽への関心を拓こうとしている。

北九州市では当地出身の音楽家の活動が目覚ましい。中村大地が9月に北九州市立響ホールでデビューリサイタルを行うなど、福岡市内とは異なる形で新たな風を巻き起こしている。北九州国際音楽祭はアジア人音楽家の「いま」を届け、東アジア文化都市としての役割を果たすべく努めている。特にダン・タイソンのリサイタルや中学生の鑑賞教室では、繊細極まるピアノの音色が異次元の聴体験をもたらした。響ホールは、創立21周年となる響ホール室内合奏団の活動の他、東京藝術大学と連携した早期教育プロジェクトにより、人材育成拠点としても機能している。

第21回を数える別府アルゲリッチ音楽祭では、アルゲリッチの娘と孫、第一線で活躍する日本人音楽家たちとの彼女ならではの共演が成立した。音楽祭は、しいきアルゲリッチハウスにおける若手のリサイタルをはじめ育成面にも力を注いでいる。iichiko総合文化センターでは2020年の生誕250年に向けて、次代を担う気鋭のウェールズ弦楽四重奏団がベートーヴェンの全弦楽四重奏曲を演奏する企画を継続中。現代的アンサンブルで室内楽ファンを生み出している。また「大分市地域おこし協力隊事業」による自治体主導の「大分の音楽」コンサート第2回（2月）では、地域で活動する複数の作曲家による地域にちなんだ新作が初演されており、企画の独自性が耳目を引いた。

6月には長崎OMURA室内合奏団が日本オーケストラ連盟の準会員として登録された。九州では2番目の加入となる。大村を拠点にする地域団体の地道で継続的な活動が認められたことの意義は深い。

「熊本地震復興祈念コンサート」では、下野竜也指揮のヴェルディのレクイエムを通して、亡くなられた方へ音楽による追悼がなされた。3回目の区切りに達したことで、次回からは音楽祭へと発展するという。復興のための企画は多面的に継続されている。11月に山鹿市の八千代座で行われたケント・ナガノ指揮ハンブルク・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによるチャリティーコンサートでは、メンバーと子供たちとの共演が温かい記憶を残した。

本稿でとり上げられなかった他地域での活動は数えきれない。地元密着型の音楽祭の他、特に聴衆参加型プロジェクトや街中の多様な場を活用した演奏会、視覚・聴覚障がいの方と共に楽しむ演奏会など、次世代型の場づくりがアクティブになっている。このような動向を中心に、2020年にはより多くの人々が音楽文化に参加すること、これが今後の展望となるだろう。